

報告・資料

良性妬みと悪性妬みを用いた妬みパターンの類型化および自尊感情との関連について；大学生を対象に

坪 望宙*・一條 玲香*・内田 知宏*

The classification of benign and malicious envy patterns and their relationship with self-esteem of university students

Mihiro Tsubo, Reika Ichijo, Tomohiro Uchida

Abstract

In this study, we sought to understand envy in both its benign and malicious aspects, and to classify envy patterns by the strength of each aspect. We also examined the nature of the relationship between envy patterns and self-esteem. A questionnaire survey was conducted, targeting 229 university students. Cluster analysis revealed envy to be divided into four groups: a “Mixed benign-malicious group,” a “Benign-predominant group,” a “Low envy group,” and a “Malicious-predominant group.” One-way analysis of variance was performed, showing the self-esteem of the “Benign-predominant group” and the “Low envy group” to be significantly higher than in the “Malicious-predominant group.” These findings show that envy has two patterns—benign and malicious—that are independent of each other and can in some cases form contradictory relationships. Moreover, envy and self-esteem did not show a simple relationship, which we argue shows that the benign and malicious aspects of envy are correlated in a mixed way.

Keywords: Benign Envy, Malicious Envy, cluster analysis, self esteem

問題と目的

妬みとは、他者が自分よりも何らかの点で有利、優位な状況にあることを知ることによって生じる不快な感情反応のことである（澤田，2003）。Smith（2000）によれば、妬みは社会的比較によって生じる自己意識的感情のひとつとされている。社会的比較によって生じる感情は、比較の方向性、感情の性質、注意の方向性という3つの観点から分類され、比較の方向性とは優れた他者と比較するか（上方比較）劣った他者と比較するか（下方比較）を示し、感情の性質とは他者と自分が感じ

る感情価が一致しているか（同化的）一致していないか（対比的）を示し、注意の方向性とは注意が自己に向けられているか（自己焦点）他者に向けられているか（他者焦点）自己と他者の両方に向けられているか（自他焦点）を示しているという。そして、澤田（2003）、澤田・藤井（2016）、中井・沼崎（2018）はSmith（2000）の理論を用いて、妬みは、優れた他者と比較した際（上方比較）、劣った自己だけでなく優れた他者にも同時に注意が向けられているとき（自他焦点）に生じる、ネガティブ（対比的）な自己意識的感情だと考えることができると説明している。

* 尚綱学院大学大学院総合人間科学研究科 (Graduate School of Comprehensive Human Sciences, Shokei Gakuin University)
受領2020.8.18 受理2021.4.1

そして、このような妬み感情は、「学校、職場」、「家族」、「友人」、「恋愛」などにおいて、自分にとって望ましい（あるいは重要な）領域において、他者が優れた遂行を成したことを目の当たりにすることで喚起されると説明されている (Tesser & Collins, 1988; Salovey, 1991)。たとえば、子ども同士のいじめや様々な問題行動の背景に作用している要因として妬みが注目されており、子どもの妬みの対象となる人物については友人が選ばれていることがわかっている (澤田, 2003)。また、妬みの情念から恋人や恋敵に殺意を抱いたり、実際に危害を加えるような行動に及んだり制裁を加えることはまれではなく (荻野, 1983)、とくに、相手を束縛し、身体的、心理的暴力をふるう Domestic Violence (DV) の大きな要因にはパートナーの妬みが挙げられている (遠藤 2007; 瀧田 2009)。このように、妬みは関係の崩壊のみならず、時に個人の心身を傷つけ、生命すらも脅かしかねない事態に繋がることもあるのである (神野, 2015)。

従来、このような妬み感情は、優れた他者への敵意を含み、社会的に望ましくない行動を導くと考えられているが、近年、妬みには良性妬みと悪性妬みというサブタイプが存在し、両者は同じ妬みでありながらも独立した概念であると考えられている (澤田・藤井, 2016)。良性妬みは自分自身を高めたり、拡散的思考を要する課題に長く取り組んだりするなどのポジティブな働きがあり、他者の幸せがその他者が享受するにふさわしいと感じられる際に生じる、いわゆる羨みである。悪性妬みは優れた他者を引きずり下ろそうとする意図と関連し、他者の幸せがその他者が享受するにふさわしくないと感じられる際に生じる、いわゆる従来の妬みである。

良性妬みと悪性妬みは Lange & Crusius (2015) によって開発された Benign and Malicious Envy Scale (以下、BeMaS) を用いて測定することができる。パーソナリティ特性としての妬みややすさに

ついて、他者を引きずり降ろそうとする悪性妬み5項目と、優れた他者に自分も追いつこうとする良性妬み5項目の2つの下位尺度から構成されており、その信頼性・妥当性も確認されている。澤田・藤井 (2016) はこれを翻訳し、因子分析によって2因子構造であること、さらには内的整合性、基準関連妥当性を検証している。

これまでに BeMaS を用いた研究では、Lange & Crusius (2015) は、マラソン競技において、良性妬みを抱きやすい者は競技会に参加する前に目標を高く設定し、さらに実際の成績も向上したことを報告している。また、澤田・藤井 (2016) は、学業にかかわる試験においても同様に、良性妬みをもちやすい人は、目標を高く設定し、成績もよくなる効果があることを示している。一方、悪性妬みの抱きやすさは、他者の不幸を喜ぶ感情であるシャーデンフロイデを喚起させることが示されている (稲垣, 2019)。このように、良性妬みは悪性妬みよりも好ましいものとして扱われているが、とはいえ個人への対処として、いたずらに悪性妬みを良性妬みに変えようとしても、両者は共変しないため功を奏しないという指摘もある (澤田・藤井, 2016)。たとえば、増井・下司・澤田・小塩 (2018) は、妬みと同様に望ましくないものとして扱われてきた強欲という特性が良性妬みとも、悪性妬みとも正に相関することを報告している。そして、この結果によって、強欲的な人は自身よりも優れた立場にいる他者を強く妬むというネガティブな側面だけでなく、目標達成のために自分を高め、高いパフォーマンスを残すというポジティブな側面もあることを見出している。妬みについても、良性か悪性かという二値的な表れ方だけではなく、良性妬みと悪性妬みが混在する場合や、一方でどちらの妬みも感じない場合など様々なパターンが存在する可能性が考えられる。そこで、本研究では、良性妬み、悪性妬みを同時に評価できるという BeMaS の特徴を活用し、良性妬

み、悪性妬みの高低によって、妬みのパターンがどのように類型化できるのか探索的に解析を試みる。

また、個人特性の中で妬みとの関連が検討されてきた代表的なものとして自尊感情 (self-esteem) が挙げられる (坪田, 2011)。自尊感情は、自己の価値と能力に関する感覚および感情である (Rosenberg, 1965)。White & Mullen (1989) は、妬みとは親密な関係の中で現在自分が持っている自尊感情や価値ある関係への喪失や脅威の認知に応じて現れる思考、感情、行動のコンプレックスと述べており、妬みの重要な要素として自尊感情を位置づけている。さらに、多くの実証的な先行研究によって、妬みと自尊感情との間に負の関連が見出されている (e.g., Stewart & Beatty, 1985; Jaremko & Lindsey, 1979; Buunk, 1995; 坪田, 2002; 澤田, 2008)。しかし、一方で自尊感情と妬み傾向が明確な関係を示さなかった研究もあり (e.g., Buunk, 1981; Mathes & Severa, 1981; Shettel-Neuber, Bryson & Young, 1978)、両者の関係は頑健ではないという指摘もある (神野, 2018)。近年では、BeMaS を用いて良性妬み、悪性妬みと自尊感情との関連の検討することで、悪性妬みとは負の相関を示すが、良性妬みとは相関しないことが示されている (澤田・藤井, 2016)。このように、妬みを良性、悪性の両側面で捉えることで自尊感情との関連が明らかになりつつあるが、良性妬みと悪性妬みが混在する場合や、どちらの妬みも存在しない場合では、自尊感情がどのように関係するのかが明らかではない。そこで、良性妬みと悪性妬みについて、それぞれ単独の因子としてだけでなく、両側面の組み合わせから類型化を行い、それらの自尊感情の程度に違いがあるのか否かの検討を行い、妬みと自尊感情の関連についてのより詳細な知見を得ることを目的とする。

方法

1. 調査手続き

2019年7月に A 大学の学部生に対し、大学の講義の中で質問紙調査を実施した。230名から回答が得られ、このうち欠損値のみられた1名を除いた229名(男性111名、女性118名)を分析対象とした。対象者の平均年齢は19.13歳(標準偏差は.99)であった。倫理的配慮として、回答は自由意志であること、匿名であること、不参加の場合でも不利益を受けないことについて口頭および文書で説明した。

2. 調査内容

質問紙の中で、はじめに年齢と性別について尋ね、さらに、日本語版 BeMaS、妬み傾向尺度 (Dispositional Envy Scale; 以下、DES)、およびローゼンバーグ自尊感情尺度 (Rosenberg Self-Esteem Scale; 以下、RSES) への回答を求めた。

日本語版 BeMaS は特性としての良性・悪性妬みを測定するのに有効な尺度である Lange & Crusius (2015) の原典を澤田・藤井 (2016) が翻訳したものである。10項目の質問に対して、「1. 全く当てはまらない」「2. 当てはまらない」「3. どちらかといえば当てはまらない」「4. どちらかといえば当てはまる」「5. 当てはまる」「6. とても当てはまる」の6段階で評価を行う。

DES は、Smith, Parrott, Diener, Hoyle, & Kim. (1999) の原典を澤田・新井 (2002) が翻訳したものである。もともと澤田・新井 (2002) の日本語版は児童・生徒用であったため、原義を損なわないように表現を適宜変更し、大学生にも適用可能なものに改めた澤田・藤井 (2016) の改変版を用いた。8項目の質問に対し、「1. いいえ」「2. どちらかといえばいいえ」「3. どちらとも言えない」「4. どちらかといえばはい」「5. はい」の5段階で評価を行う。

RSESは自尊感情を測定する、10項目からなる自己記入式尺度である(Rosenberg, 1965)。本研究では海外でも広く採用されている4件法の手法を採用しており、なおかつ逆翻訳の過程を経ており、原版と日本語版の表現の等価性についても検討がなされているMimura & Griffiths (2007)の日本語版RSESを使用した。回答者は、「1. 強くそう思わない」「2. そう思わない」「3. そう思う」「4. 強くそう思う」の4段階で評価を行う。得点が高ければ高いほど、自尊心が高いことを示す。

3. 統計解析

日本語版 BeMaS の10項目について、探索的因子分析を実施し、当尺度の因子構造についての検証を行い、さらに、抽出された因子を用いて対象者を類型化するためにクラスター分析を行った。また、各尺度間の相関分析、男女差の比較のため

の *t* 検定、クラスターごとの男女の偏りを検討するための χ^2 検定も実施した。さらに、クラスターごとの RSES 得点を比較するために一元配置の分散分析も実施した。なお、等分散性の検定には Levene 検定を用いた。これらの統計処理は SPSS 20.0 for windows を用いて行い、統計上の有意水準はすべて両側5%未満とした。

結果

1. 日本語版 BeMaS の因子分析

日本語版 BeMaS の10項目について、探索的因子分析(最尤法, プロマックス回転)を実施した。因子数の決定に際してはスクリーテストを用い、その結果、2因子構成がもっともまとまりがよく、解釈がしやすいモデルとして判断された。その結果を表1に示す。

表1. 日本語版 BeMaS の因子分析結果(最尤法, プロマックス回転後)

項目	1	2	共通性
6 羨ましく思える人たちに対して、私は悪意を感じる	.89	-.09	.78
8 羨ましいと思う気持ちは、私にその人を嫌いにさせる	.84	-.11	.71
10 他の人たちの成果を見ると、私はムカついてしまう	.78	-.11	.61
2 優れた人たちが有利さを失うように、私は願う	.63	-.19	.41
5 もし私が欲しいと思っているものを持っている人たちがいたら、私はそれを取り上げたいと思う	.61	.06	.39
3 もし他の人が私よりも優れていると気付いたら、自分をもっと高めようとする	-.12	.87	.76
7 他の人たちの優れた成果に、私も追いつこうと努力する	-.12	.79	.63
4 他人を羨ましがめることは、私にとって目標を達成する刺激になる	-.11	.72	.52
9 もし誰かに優れた資質や成果、または持ち物があるなら、私はそれを自力で手に入れようとする	-.07	.63	.40
1 他人を羨ましいと思うとき、私は今後どうすれば同じように成功出来るかと考える	-.01	.60	.36
固有値	3.08	2.48	
寄与率	30.81	55.62	
因子間相関	1	—	.12
	2	—	—

BeMaS; Benign and Malicious envy Scale

第1因子は、#6(羨ましく思える人たちに対して、私は悪意を感じる)、#8(羨ましいと思う気持ちは、私にその人を嫌いにさせる)、#10(他の人たちの成果を見ると、私はムカついてしまう)、といった5項目が含まれている。これらの項目は原版の悪性妬み因子の項目とも一致しており、本研究でもそのまま「悪性妬み」として用いた。

第2因子は、#3(もし他の人が私よりも優れていると気付いたら、自分をもっと高めようとする)、#7(他の人たちの優れた成果に、私も追いつこうと努力する)、#4(他人を羨ましがすることは、私にとって目標を達成する刺激になる)といった5項目が含まれている。これらの項目についても、原版の良性妬み因子の項目とも一致しており、本研究でもそのまま「良性妬み」として用いた。

2. 各尺度の基礎統計および尺度間相関

本研究で用いた尺度それぞれの基礎統計、および尺度間相関を表2に示す。内的整合性を表す α 係数については、すべての尺度得点において、十分な値が得られた。これらすべての尺度得点に対し、Levene 検定によって等分散性を確認した上で男女差の比較のための t 検定を実施した結果、どの尺度得点においても有意な差はみられなかった。また、各尺度間の相関分析を行ったところ、悪性妬みが自尊感情、および妬み傾向が有意な相関を示していたのに対し、良性妬みは自尊感情、および妬み傾向のいずれの尺度とも相関していなかった。

表2. 各尺度の相関および基礎統計

		良性妬み	悪性妬み	DES	RSES
日本語版 BeMaS	良性妬み	—	.15 *	.05	.10
	悪性妬み	—	—	.58 **	-.20 **
DES	妬み傾向	—	—	—	-.37 **
RSES	自尊感情	—	—	—	—
α		.84	.86	.85	.72
平均値		3.54	2.49	2.90	24.57
標準偏差		1.00	.84	.93	3.69

BeMaS: Benign and Malicious envy Scale

DES: Dispositional Envy Scale

RSES: Rosenberg Self-Esteem Scale

** $p < .01$, * $p < .05$

3. 妬みの特徴による対象者の類型化

悪性妬み、良性妬みの2つの特徴を用いて対象者のグループ化を試みるため、クラスター分析(ward法)を実施した。その結果、229名の対象者は4つのグループに分けられた。クラスター1($n=65$; 28.4%)は悪性妬みも良性妬みも高い群(良性悪性混在群)、クラスター2($n=98$; 42.8%)は悪性

妬みは低く良性妬みが高い群(良性優位群)、クラスター3($n=25$; 10.9%)は悪性妬みも良性妬みも低い群(妬み低群)、クラスター4($n=41$; 17.9%)は悪性妬みが高く良性妬みが低い群(悪性優位群)と解釈された(図1)。なお、各クラスターにおける男女の偏りを検討するため χ^2 検定を実施したが、有意な偏りはみられなかった。

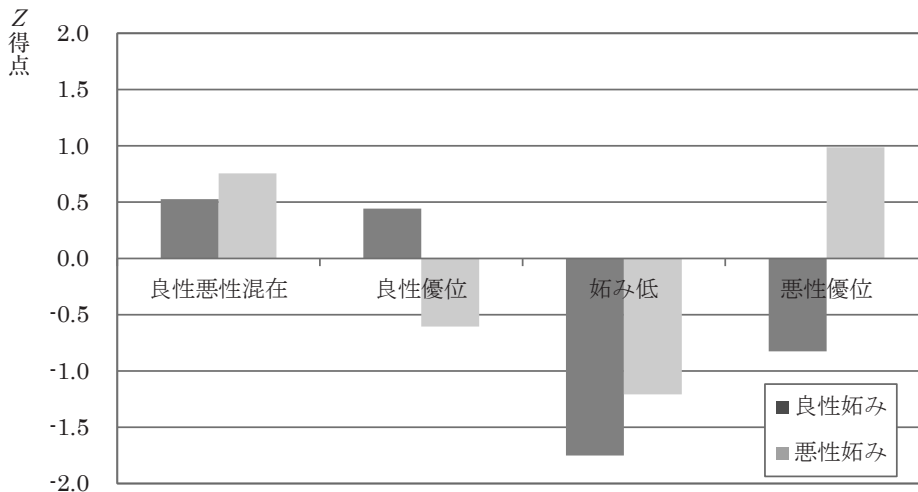


図1. 日本語版 BeMaS による対象者の妬みのクラスターパターン (N= 229)

4. 妬みの型と自尊感情の検討

クラスター分析によって分類された4つの妬みの型と自尊感情との関連を検討するため、クラスターの型を独立変数、自尊感情得点を従属変数とした一元配置分散分析を行なった。なお、等分散性の確認として Levene 検定を行った結果、等分

散性が確認された。一元配置分散分析の結果、有意な主効果が認められた ($F(3, 225) = 4.98, p < .01$)。その後の検定 (Tukey) によると、良性優位群と妬み低群の自尊感情は、悪性優位群の自尊感情よりも有意に高いことが確認された (表3)。

表3. 妬みパターンのクラスターを要因とした分散分析結果

	n	RSES	
		平均	標準偏差
クラスター1 (良性悪性混在群)	65	24.32	3.58
クラスター2 (良性優位群)	98	25.09	3.31
クラスター3 (妬み低群)	25	25.92	4.72
クラスター4 (悪性優位群)	41	22.88	3.54
群間差		2 > 4 *	
		3 > 4 *	

* $p < .05$

考察

本研究は、良性妬みと悪性妬みを測定するために作成された BeMaS の得点をもとにクラスター分析をおこない、妬みのパターンを類型化することを試みた。さらに、妬みと自尊感情の関連について検討するため、それぞれの尺度間の相関分析を行うとともに、良性妬みと悪性妬みについては、それぞれ単独の因子としてではなく、組み合わせのパターンの違いによって、自尊感情の程度に違いがあるのか否かについて検討を行った。

BeMaS の10項目に対する因子分析の結果からは、先行研究 (Lange & Crusius, 2015; 澤田・藤井 2016) で示された2因子(「良性妬み」, 「悪性妬み」) が追認された。これらの因子は、それぞれが独立した構成要素であるとする澤田・藤井 (2016) の主張に合致する。とくに、良性妬みについては、妬み傾向と有意な相関を示しておらず、従来の DES では測定することが困難な構成概念であると考えられることもできる。そこで、本研究では、この特徴をいかし、クラスター分析によって、良性妬み、悪性妬みの2因子を組み合わせた詳細な妬みの分類を試みた。その結果、悪性妬みは低いが良性妬みは高い「良性優位群」、悪性妬みが高いが良性妬みは低い「悪性優位群」、さらには、悪性妬みも良性妬みも高い「良性悪性混在群」、悪性妬みも良性妬みも低い「妬み低群」が抽出された。とくに、「良性悪性混在群」については、良性妬み、悪性妬みをそれぞれ独立した構成要素として扱った BeMaS を用いたからこそ得られた類型であり、それぞれの妬みは敵意や悪意の有無で背反的に区別されるのではなく、両立し得ることを示唆している点で興味深い。そもそも、本研究で用いた BeMaS は Benign and Malicious Envy Scale と名付けられているように、benign envy と malicious envy を測定している。これらに該当する言葉のない (中井・沼崎, 2018) 日本においてはひとまず、benign

には良性、malicious には悪性、という言葉があげられているが、benign には優しい、柔らかい、親切的な、という意味が含まれ、malicious には悪意のある、意地の悪い、うらむという意味が含まれている。良性、悪性と銘打ってしまうと、片方が良いもので、もう一方は悪いもの、という一元的な解釈を招きがちであるが、原典に込められた意味を丁寧に捉えていく必要があると考えられる。その意味では、benign envy, malicious envy という表現を取ってそのまま用いることで、一元的な解釈を防ぎ、BeMaS のもつ特性を活かした解釈が促進されるのかもしれない。Smith (2000) のモデルでいえば、妬み低群が、他者に注意は向いておらず、感情の性質も対比的ではない特性をもっているのに対し、良性悪性混在群は、自己にも他者にも注意を向け、対比的な感情をもつという従来の妬みの特性をもつ一方で、同化的な感情も備えている両価的な群と考えられる。こうした妬みの特性はすべての対象者において認められるわけではないが、大学生の3割弱程度と決して少なくない割合で認められることが示唆された。

さらに、本研究では、これら4つの妬みのパターンの違いによって、自尊感情に違いがあるのか否かについての検討を行った。その結果、4群において自尊感情尺度の平均得点に違いが認められ、その中でも、悪性優位群における自尊感情が他群と比べて有意に低く、その水準は22.87であった。菅(1984)は、RSES を4件法の翻訳を用いた場合、20点以下を低い、30点以上を高いとみなすことを提案している。また、国際比較研究でも、日本の健常者の平均はおおむね25点くらいであること (Schmitt & Allik, 2005) も考慮すると、悪性優位群における自尊感情は平均よりもやや低い水準にあると判断することが出来る。このような悪性優位群における自尊感情の低さ、さらには、DES や悪性妬みが自尊感情と有意な負の相関を示していたことは、先行研究 (e.g., Stewart & Beatty, 1985; Jaremko & Lindsey, 1979;

Buunk, 1995; 坪田, 2002; 澤田, 2008)の妬みと自尊感情との関連を部分的に支持する結果でもありと考えられる。

一方、「良性優位群」および「妬み低群」の自尊感情尺度の平均得点は (Schmitt & Allik, 2005)でも平均並みと扱われている水準であった。また、有意差は認められなかったものの、「良性悪性混在群」の自尊感情尺度の得点は「妬み低群」と「悪性優位群」との中間に位置していることがうかがわれた。このように、悪性妬みは単独では自尊感情と負の相関関係を示すが、良性妬みと組み合わせて検討することで異なった結果を示すことが見出された。この結果は、自尊感情と妬み傾向が明確な関係を示さなかったという報告 (e.g., Buunk, 1981; Mathes & Severa, 1981; Shettel-Neuber et al., 1978) を支持するものと考えられる。なお、先行研究において自尊感情と妬み傾向の関連についての知見が一致しない理由として神野 (2018) は、RSES で測定される自尊感情の曖昧さについても触れている。Rosenberg (1965) は、自尊感情は2つの異なる側面があることを指摘している。ひとつは個人が自分は「自分は他者よりも優れている (very good)」と感じる側面であり、もうひとつは、「自分はこれで十分 (good enough)」と感じる側面であるという (遠藤, 1992)。本研究では、RSES で測っている自尊感情は、後者の「自分はこれで十分」と感じる程度である (内田・上埜, 2010) という立場をとり、妬みと自尊感情の関係は、単純な相関関係ではなく、良性妬みと悪性妬みを組み合わせて検討することによって変動しうることを見出した。日本人の自尊感情は諸外国を比べると低く、学校教育の中で自尊感情を高める実践がなされているという (小塩ら, 2014)。こうした実践の中で、たとえば、悪性妬みを感じた場合にそれを低減しようとする試みがうまくいかないときは (中井・沼崎, 2018)、悪性妬みを無理に抑え込むのではなく良性妬みを喚起するアプロ-

チをとることで自尊感情を高め得るかもしれない。

ただし、妬みがあくまで社会的比較によって生じる感情であること (澤田・藤井, 2016) を踏まえると、自尊感情を「自分は他者よりも優れている (very good)」と感じる側面として捉え、それが良性妬みと悪性妬みの相互作用によってどのように関連するのかについての検討が望まれる。また、神野 (2018) が試みたような、自尊感情を一次元的な高低だけで捉えるのではなく、自己評価の不安定性や脆弱さなどにも着目して妬みとの関連性を精査していく必要があることも課題として挙げられる。さらに、自尊感情以外の心理的要因 (攻撃性や対人関係, など) との関連も検討していくことで、妬みの特徴がより明らかにしていくことも今後の研究における重要な方向性といえる。また、本研究の限界点として、対象が大学生に限られており、一般化、および普遍化が困難であることも挙げられる。妬みという感情は原初的な心性のひとつであり社会生活を行う上で避けることのできないものである (齊藤, 2010) ことを踏まえると、幅広い年齢層を対象に調査を行い、それぞれの妬み特性の異同について明らかにしていくことも必要であると考えられる。とくに、学童期や思春期において、本研究で抽出された4類型は見出されるのか、また、それがいじめなどの問題行動どのように関連しているのかについて検討していくことも今後の課題のひとつと言えよう。さらに、生活の基盤や自我同一性がある程度確立した成人期において、両面的な「良性悪性混在群」がどの程度存在するのかについても興味深いところである。また、本研究では妬みを特性として扱っていったが、学業、運動、恋愛など特定の場面に際しての妬みを扱う形式も多い (Cohen-Charash, 2009; Van de Ven, Zeelenberg, & Pieters, R. 2011)。今後の研究で、特定の場面における良性妬み、悪性妬みの複合的な描写をし、さらにはその妬み感情

と上手く付き合っていく対処法について検討していくことも有効であると考えられる。以上のような課題もあるが、本研究によって、妬みという現象を複合的なものとしてとらえることで、様々な心理現象との関連をより詳細に理解していけることが示唆された。

文献

- Buunk, B. (1981). Jealousy in sexually open marriages. *Alternative Lifestyles*, **4**, 357-372.
- Buunk, B. P. (1995). Sex, self-esteem, dependency and extradyadic sexual experience as related to jealousy responses. *Journal of Social and Personal Relationships*, **12**, 147-153.
- Cohen-Charash, Y. (2009). Episodic envy. *Journal of Applied Social Psychology*, **39**, 2128-2173.
- 遠藤智子 (2007). デート DV - 愛か暴力か, 見抜く力があなたを救う KK ベストセラー
- 遠藤由美 (1992). 自己認知と自己評価の関係—重みづけをした理想自己と現実自己の差異スコアからの検討— 教育心理学研究, **40**, 157-163.
- 稲垣勉 (2019). Dark Triad とシャーデンフロイデ：特性妬みとの関連も踏まえて 鹿児島大学教育学部研究紀要. 人文・社会科学編, **70**, 133-142.
- Jaremko, M. E. & Lindsey, R. (1979). Stress-coping abilities of individuals high and low in jealousy. *Psychological Reports*, **44**, 547-553.
- 神野雄 (2015). 妬み研究の概観と展望 神戸大学発達・臨床心理学研究, **14**, 18-28.
- 神野雄 (2018). 青年の恋愛関係における妬み傾向は自尊感情に規定されるか—自己愛的観点からの検討 パーソナリティ研究, **27**, 125-139.
- Lange, J. & Crusius, J. (2015). Dispositional envy revisited: Unraveling the motivational dynamics of benign and malicious envy. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **41**, 284-294.
- 増井啓太・下司忠大・澤田匡人・小塩真司 (2018). 日本語版強欲傾向尺度の作成 心理学研究, **88**, 566-573.
- Mathes, E. W. & Severa, N. (1981). Jealousy, romantic love, and liking: Theoretical considerations and preliminary scale development. *Psychological Reports*, **49**, 23-31.
- Mimura, C. & Griffiths, P. (2007). A Japanese version of the Rosenberg Self-Esteem Scale: Translation and equivalence assessment. *Journal of Psychosomatic Research*, **62**, 589-594.
- 中井彩香・沼崎誠 (2018). 妬みのサブタイプ理論とその測定法の検討：日本においても悪性妬みと良性妬みは存在するか？対人社会心理学研究, **18**, 77-84.
- 小塩真司・岡田涼・茂垣まどか・並川努・脇田貴文 (2014). 自尊感情平均値に及ぼす年齢と調査年の影響—Rosenberg の自尊感情尺度日本語版のメタ分析— 教育心理学研究, **62**, 273-282.
- 荻野恒一 (1983). 妬みの構造 紀伊國屋書店
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- 齊藤浩一 (2010). 情動としての「妬み」の検証とメタ認知療法 東京情報大学研究論集, **13**, 29-39.
- Salovey, P. & Rothman, J. (1991). Envy and jealousy: Self and society. In Salovey, P. (Ed.), *The psychology of jealousy and envy* (pp.271-286). New York: Guilford Press.
- 澤田匡人・新井邦二郎 (2002). 児童・生徒用妬み測定尺度の作成 筑波大学心理学研究, **24**, 219-226.
- 澤田匡人 (2003). 児童・生徒における妬み感情喚起場面の諸側面 筑波大学発達臨床心理学研究, **15**, 57-64.
- 澤田匡人 (2008). シャーデンフロイデの喚起に及ぼす妬み感情と特性要因の影響—罪悪感, 自尊感情, 自己愛に着目して— 感情心理学研究, **16**, 36-48.

- 澤田匡人・藤井勉 (2016). 妬みやすい人はパフォーマンスが高いのか?—良性妬みに着目して—心理学研究, **87**, 198-204.
- Schmitt, DP. & Allik, J. (2005) . Simultaneous administration of the Rosenberg Self-Esteem Scale across 53 nations: Exploring the universal and culture-specific features of global self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, **89**, 623-642.
- Shettel-Neuber, J., Bryson, J. B. & Young, L. E. (1978) . Physical attractiveness of the “other person” and jealousy. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **4**, 612-615.
- Smith, R. H., Parrott, W. G., Diener, E. F., Hoyle, R. H. & Kim, S. H. (1999) . Dispositional envy. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **25**, 1007-1020.
- Smith, R. H. (2000) . Assimilative and contrastive emotional reactions to upward and downward social comparison. In J. Suls & L. Wheeler (Ed.) , *Handbook of social comparison: Theory and research* (pp.173-200) . New York: Kluwer Academic/Plenum Publishers.
- Stewart, R. A. & Beatty, M. J. (1985) . Jealousy and self esteem. *Perceptual and Motor Skills*, **60**, 153-154.
- 菅佐和子 (1984). SE (Self-Esteem) について. 看護研究, **17**, 117-23.
- 瀧田信之 (2009). それ, 恋愛じゃなくてDVです WAVE 出版
- Tesser, A. & Collins, J. (1988) . Emotion in social reflection and comparison situations: Intuitive, systematic, and exploratory approaches. *Journal of Personality and Social Psychology*, **55**, 695-709.
- 坪田雄二 (2002). 自尊感情と妬みの関連性 広島県立大学論集, **6**, 1-10.
- 坪田雄二 (2011). 妬みの生起における予期の役割 対人心理学研究, **11**, 101-108.
- 内田知宏・上埜高志 (2010). Rosenberg 自尊感情尺度の信頼性および妥当性の検討—Mimura & Griffiths 訳の日本語版を用いて— 東北大学大学院教育学研究科研究年報, **58**, 257-266.
- Van de Ven, N., Zeelenberg, M., & Pieters, R. (2011). Why envy outperforms admiration. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **37**, 784-795.
- White, G. L. & Mullen, P. E. (1989) . *Jealousy: Theory, research, and clinical strategies*. New York : Guilford Press.